

杜甫における「杜鵑」のイメージ

谷口眞由実

はじめに

盛唐の詩人杜甫（七一二～七七〇）が安祿山の乱後（史思明らの乱は未終息）、官を辞し秦州（甘肅省）、同谷（甘肅省）、陰閣（四川省）を経て、成都（現在の四川省成都市）に入ったのは、乾元二年（七五九）十二月である。成都入りしてから約六年滞在（ただし、近隣諸州への出入りがある）した成都時代、杜甫は「杜鵑」をしばしば詠じている。また、その後永泰元年（七六五）の五月に成都を後にして南下し、渝州（四川省）、忠州（四川省）、雲安（四川省）へと旅した時期にも、杜甫は「杜鵑」「子規」などを詠じた詩を多数制作している。なぜ、杜甫はこの時期に多くの「杜鵑」「子規」を詠じたのだろうか。杜甫がこの成都時代及び雲安滞在中に「杜鵑」を集中的に詠じた理由について考えたいということが、本論の一つ目の問題意識である。

成都を中心とする地域は古代の蜀（現在の四川省）の地域であり、

雲安付近は「巴」と呼ばれ、両者合わせて「巴蜀」とも呼ばれるが、ともに蜀王杜宇（望帝）の魂が杜鵑になったとの伝説が広く知られている地域である。杜甫も早くからこの伝説を知っており、強い興味を抱いていたと推測される。また、蜀の望帝が当初民を教化し、蜀の基盤を作った英明な君主として活躍し、民衆からも慕われていたこと、しかし、水害に対処できず、治水に功績のあった宰相に位を譲り失意のうちに死したことを蜀の人々が悲しんだと伝えられている。死んだ望帝の魂の化身とされる杜鵑の悲しげな声は後述するように六朝詩に詠じられ始め、そして唐代になって少しずつ詠じられる例が多く見られるようになる。しかし、杜甫の「杜鵑」を詠じた詩には、明らかに他の詩人とは全く異なる意識が見られるものがある（一部に他の詩人と同じようなものもある）。杜甫が杜鵑に託した思いをあらためて検討したいというのが、本論の二つ目の問題意識である。

ところで、すでに植木久行氏「ほととぎすのうた 杜鵑と郭公をめぐる」(『比較文学年誌』第一五号、一九七九年。以下、「植木論文」と略す)において、中国古典詩に詠じられた「杜鵑」と日本文学の古典にみられる「ほととぎす」や「郭公」との比較が論じられている。特に、唐代以前の文献に見える「杜鵑」をめぐる伝説の生成やあるいは異同について詳細に究明され、さらに六朝から唐詩の用例についても、時代を追って詳細に分析されている。¹⁾主だったイメージについての分析もされており、しかも様々な文献に言及された論文である。その第七章では盛唐詩人についても論述されているのであるが、杜甫についてはまだ論ずるべき点が残されているように思う。植木論文を参考にさせて頂きつつ、特に杜甫を中心に、右の問題意識に基づき検討したい(なお、原文及び訓読などでは常用漢字のあるものは常用漢字を使い、常用漢字がないものについては正字を使うこととする。ただし、固有名詞など、一部正字を使ったものもある)。

第一節 杜鵑に関する伝説

「杜鵑」をめぐる伝説の諸相、また生成の過程については、植木論文に詳しい。ここでは特に杜甫の用例に直接関わり、影響を与えているものに限定して、言及することとしたい。

植木氏も指摘しているが、唐代の代表的な類書『芸文類聚』、『初学記』の鳥の部には「杜鵑」について記述がない。このことは唐代以前の文学においては「杜鵑」「子規」が題材としてあまり取り上げられなかったことを物語るであろう。

「杜鵑」「子規」については、漢・揚雄『蜀王本紀』⁽²⁾、『華陽国志』蜀志や『荊楚歲時記』などに収載される伝説や、『禽經』⁽³⁾や『本草拾遺』⁽⁴⁾などに記載がある。

「杜鵑」は、和名ほととぎす。蜀の望帝、名は杜宇にまつわる伝説で知られている。望帝は治水に功績のあった鸞靈(また、開明)を宰相とし、治水に功績をあげた彼に位を譲って他郷(または西山)に去り、死後その魂が化してこの鳥になった(あるいは望帝が去った後、杜鵑が鳴く声を聞いて人々が悲しんだ)との伝説がある。その声は「不如帰去」と聞こえるという。その声はさまざまな方言によって表現され、鳥の名とされたため、子規、杜魄、蜀魂、杜宇、鵓、催帰などの名で呼ばれる。

まずは、植木論文にも引かれているが、杜甫が典拠としたと考えられる杜鵑に関する伝説に簡潔に言及することとしたい。

I 『華陽国志』蜀志⁽⁵⁾

『華陽国志』は、晋の常璩の撰で、十二卷。三国時代から晋代における主に四川・雲南方面の歴史・地理を記述したものとされる。「蜀志」に見える記載は、次の通りである。

次王を魚鳧と曰ふ。後王有り杜宇と曰ふ。民に農に務むるを教へ、一に杜主と号す。時に朱提に梁氏の女利なるもの有り、江源に遊ぶ。宇、之を悦び納れて以て妃と為す。治を郫邑に移し、或は罽上に治す。七国王を称せしとき、杜宇、帝を称し、号して望帝と曰ひ、名を蒲卑に更む。自ら以へらく、「功德は諸王より

高し」と。乃ち褒斜を以て前門と為し、熊耳・靈関を後戸と為し、玉墨・峨眉を城郭と為し、江・潜・綿・洛を池沢と為し、汶山を以て畜牧を為し、南中を園苑と為す。会々水災有り、其の相開明、玉墨山を決し以て水害を除く。帝、遂に委ねるに政事を以てし、堯・舜禪授の義に法り、遂に位を開明に禪り、帝は西山に升りて隠る。時適々二月、子鵲鳥鳴く。故に蜀人は子鵲鳥の鳴くを悲しむなり。巴も亦た其の教に化して農務に力む。今に迄るまで巴・蜀の民、農時には先ず杜宇君を祀る。開明位し号して叢帝と曰ふ。（次王曰魚鳧。…後有王曰杜宇。教民務農、一号杜主。時朱提有梁氏女利、遊江源。宇悅之納以為妃。移治郫邑、或治瞿上。七国称王、杜宇称帝、号曰望帝、更名蒲卑。自以功德高諸王。乃以褒斜為前門、熊耳・靈関為後戸、玉墨・峨眉為城郭、江・潜・綿・洛為池沢、以汶山為畜牧、南中為園苑。会有水災、其相開明、決玉墨山以除水害。帝遂委以政事、法堯・舜禪授義、遂禪位於開明、帝升西山隱焉。時適二月、子鵲鳥鳴。故蜀人悲子鵲鳥鳴也。巴亦化其教而力農務。迄今巴・蜀民、農時先祀杜宇君。開明位号曰叢帝。）

周時代、蜀王を称した蚕叢から語り始められ、魚鳧王の次に杜宇が位置付けられている。王となった杜宇は杜主を称し、のちに帝を称し、望帝と号するようになる。蜀の望帝は民の教化に務め国の基盤を作った。たまたま起こった水害の際に、宰相であった開明が治水に功績をあげたため、古代の禪譲に倣って開明に位を譲ったという。譲位後、杜宇は西山に退隠した。たまたま二月であり、杜鵑が鳴いていたので、

蜀の人たちは杜鵑の悲痛な声を聞いて、望帝を思い悲しんだという。また、巴の人々も同じく教化を受けたので、農事を始めるとき、巴蜀の人々はまず杜宇をお祀りするという。この話では、杜宇が退隠した時、たまたま杜鵑がしきりに鳴いていたので、その哀切な声がまるで杜宇の声のように思われ、帝を悲しんだという。

植木論文では、この文章について、望帝化鳥伝説でないこと、「子鵲」の語が使われた早い例であること、陰暦二月に鳴くこと、そして望帝の神格化がなされていることを指摘する。最後の神格化に関連して注目したいのは、特に望帝が生前、蜀で善政を布き、人々に退隠後敬仰されたとする点である。この点は杜甫の杜鵑のイメージに大きく影響したと考えられる。

Ⅱ『荊楚歲時記』⁽⁶⁾

一方、梁・宗懷撰の『荊楚歲時記』三月の項にも杜鵑がみえる。

三月三日、杜鵑初めて鳴く。田家之を候とす。此の鳥、昼夜に鳴く。口赤く、天に上りて恩を乞ふ。章陸子の熟するに至れば乃ち止む。杜鵑初めて鳴く。先づ聞く者、離別を主り、其の声を学び、人をして血を厠溷の上に吐かしむ。聞く者不祥にして、之を厭ふ法、当に狗の声を為り以て之に応ずべしと。

ここに描かれる杜鵑は、その年の農事を始める合図とされ、昼夜に鳴き、口（の中）が赤い鳥として描かれる。一方、後半ではその声を聞く者は「不祥」とされ、その声を聞いた者は血を吐くとされ、その不祥を避けるには、犬の声をなすとよいという。昼夜構わず鳴く声が

人々に忌まれていたことが想像される。

ところで、このように古来さまざまな文献に「杜鵑」は見えるのであるが、植木氏も指摘するように、唐代以前の文学にはほとんど描かれていない。数は少ないが、六朝時代の文学に見える用例を次に見ておきたい。

第二節 六朝時代の用例

杜鵑・子規が文学に登場するのは比較的遅かった。まず、制作時は晋・宋・齊のいずれか未詳であるが、民間で作られた歌謡である「子夜四時歌七十五首」の春歌二十首（『樂府詩集』卷四十四、晋宋齊辭）の中に杜鵑を詠じたものが二例「其六」「其十一」にみえる。ここでは其六をあげたい。⁽⁷⁾

子夜四時歌七十五首春歌二十首（其六）

杜鵑竹裏鳴　杜鵑　竹の裏に鳴き

梅花落滿道　梅花　滿道に落つ

燕女遊春月　燕女は春月に遊び

羅裳曳芳草　羅裳　芳草を曳く

（『樂府詩集』卷四十四、清商曲辭）

前半は、梅の花が道一杯に落ち、竹林の中で杜鵑が鳴いているという、春闌を過ぎようとするころの情景である。後半は、うららかな春の季節に誘われるように月下に遊ぶ女性の姿を描いている。其十一でも季節が晩春になっているという違いはあるが、春愁を晴らそうと女性に散歩する姿を描く。子夜歌は呉の子夜という女性が歌い始めたとい

伝えられ、その後、樂府題となって、数々の替え歌が作られるようになったものである。この詩は先述のように晋代、宋代、齊代の間のいつ頃作られたか定かでなく、作者も不明の民衆の歌である。その民衆の歌謡に杜鵑が歌われているのだが、ここには鳴き声が悲痛であるという感覚は全く見えない。民間においては、杜鵑の鳴き声は春を告げるものとして捉えられていたことが分かる。

「子夜歌」は、民間の歌謡であり、また制作時期もよくわからない。作者の明らかな文学作品に描かれた最初の例としては、植木氏も指摘するように、西晋・左思（二五三？～三〇七？）の「三都賦」（三都の賦、蜀都賦・呉都賦・魏都賦からなる）の「蜀都賦」（蜀都の賦）をあげる必要があるだろう。この作品は当時、広く人々に読まれ、「洛陽の紙価を高からしむ」の故事で知られるように、富貴な人々が競って書写し、洛陽の紙の値段が高騰するほどの流行ぶりであったという。この「蜀都賦」には、杜宇の魂魄が化して杜鵑・子規となったという伝承が描かれているが、その後世の文学に与える影響は非常に大きかったに違いない。左思は高名な学者であった張載のもとを訪れて蜀地方のことを尋ね、構想に十年の歳月をかけて書き上げたといひ、また同時代の知識人たちによって「そのことばはみだりに華美でなく、必ず確かな根拠に由来しており、様々な種類の事物が描かれているのは、依拠したものである」と称された。（『晋書』卷九十二、左思伝に引かれる衛権の作った「蜀都賦」の注解の序文⁽⁸⁾）。このような「蜀都賦」に「杜鵑」が描かれたことから、蜀の鳥といえ、杜鵑・子規との連想が生まれたといつてよい。

西晋・左思の「蜀都賦」は『文選』（梁・昭明太子撰、唐・李善注、清・胡克家刻本影印、中華書局、一九七七年）賦（乙）京都中・卷四に収められている作であるが、その中に次の表現が見える。

碧出萇弘之血 碧は萇弘の血より出で

鳥生杜宇之魄 鳥は杜宇の魄より生まる

妄变化而非常 妄りに変化して常に非ず

嗟見偉於疇昔 嗟 疇昔に偉とせらる

「蜀都賦」は、蜀の鳥獸や草木、産物、偉大な人物などあらゆるものを網羅的に描く一大長篇であるが、引用部分は、古代蜀の伝説的な偉業をなした人物について述べた部分である。萇弘は周の靈王に忠義を尽くし大夫として仕えたが、讒言を受けて殺された。その血は三年後に「碧」となったという。「碧」とは、中国で非常に珍重される美しいあおみどり色の貴石である。萇弘については『莊子』外物篇に見える⁽⁹⁾。

また、杜宇、すなわち望帝の魄から杜鵑が生まれたという。「魄」は、「魂」と同義でたましい、靈魂という意味で使われる場合もあるが、「魂」と対比される場合は、肉体を主宰し、死後地上にとどまる陰の生気をいう。ここでは、どちらの意味で使われているか決め難い。この賦の場合、「魄」は押韻部分にあたることから、「魂」ではなく「魄」を使った可能性もある（『文選考異』（巻第四）に言及なし）。

杜宇化鳥伝説（杜宇が死して後に化身して杜鵑になったとする説話）については、『文選』（李善注）引用する後漢・李膺の『蜀記』⁽¹⁰⁾に、

昔人の姓の杜なるもの有り。名は宇。蜀に王たり。号して望帝

と曰ふ。宇死す。俗説に云ふ、宇化して子規と為る。子規は、鳥の名なり。蜀人子規の鳴くを聞くに、皆望帝と曰ふなり（昔有人姓杜。名字。王蜀。号曰望帝。宇死。俗説云、宇化為子規。子規、鳥名也。蜀人聞子規鳴、皆曰望帝也。）

とある。俗説、つまり世間に伝わる伝説として、望帝が死後、子規、すなわち杜鵑に化身し、蜀の人々は杜鵑の声を聞くと望帝だと思ったという。このように、「蜀都賦」においては、萇弘と杜宇は、いずれも蜀の地で、忠孝、あるいは美德や治績で知られながら、悲劇的な死を遂げ、死後碧となり、杜鵑となるという尋常ならざる奇跡を起こし、人々の尊崇をあつめて語り継がれてきた人物として詠じられている。そしてここにも、杜鵑の泣き声が悲劇的であるという叙述はない。

次に挙げるのは、六朝宋・鮑照（四一四～四六六）の「擬行路難十八首」の第七首である。「行路難」という樂府題に倣って、鮑照は「擬行路難十八首」を制作したと考えられるが、もとの漢代の古樂府は現存していない。この一連の作品は人生行路の苦難や別れの悲傷を詠じたものである⁽¹¹⁾。

擬行路難十八首其七 行路難に擬す十八首其の七

鮑照

愁思忽而至 愁思 忽ちにして至り

跨馬出北門 馬に跨りて北門を出づ

拳頭四顧望 頭を拳げて四顧して望めば

但見松柏園 但だ見る 松柏の園を

荊棘鬱蹲蹲 荊棘 鬱として蹲蹲たり

中有一鳥名杜鵑

中に一鳥有り 名は杜鵑

言是古時蜀帝魂

言ふ是れ古時 蜀帝の魂

声音哀苦鳴不息

声音哀苦して鳴き息まず

羽毛憔悴似人髡

羽毛憔悴して人の髡に似たり

飛走樹間啄虫蟻

樹間を飛走し虫蟻を啄む

豈憶往日天子尊

豈憶はんや 往日の天子の尊きを

念此死生变化非常理

此れを念へば 死生は变化して常理に非ず

中心愴惻不能言

中心愴惻として 言ふ能はず

冒頭から第五句までは、心に愁いを抱く人物がまちの北門から出立する場面を描く。この人物は突如愁いに襲われ、都の北門を出て、辺りを見回す。その目に映ったのは松柏であり、(その木々の下に) いばらがうっそうと茂っているばかりである。松や柏は、常緑樹であり、多く墓場などに植えられる木である。いばらの茂る様子と相まって、荒涼たる情景であるといえよう。そして、第六句に、松や柏の樹間にいるほととぎすが描かれる。古代の蜀帝(望帝)の魂がほととぎすになったと伝えられるが、悲しみ苦しげに泣き続け、羽毛はやつれ、まるで頭髮をそり落とされた罪人のようだ。蟻を啄んで木々の間をあちこちら飛び回る姿からは、その昔人々の尊敬を集めていた望帝を想起することはできない。そう思うと、人の生死はつねに変化して常理などないという悲しみが心の中からこみ上げて、言葉に出して言うことができない。

この詩の作中人物は、荒涼とした郊外の情景を目にし、そこに杜鵑⁽¹²⁾

の姿を見出す。蜀の望帝の魂が化したとの伝説がある杜鵑であるが、哀苦に満ちた声、やつれた羽毛、虫や蟻を啄むために木々の間をせわしく飛び回る姿に、かつての望帝の偉大な姿は微塵もない。その落魄の姿を傷み、世に常理のないことを嘆く。

ここで、注目されるのは、蜀の望帝が杜鵑となった悲しさを詠じるだけにとどまらず、杜鵑に望帝の姿を重ねることによって、望帝が落魄したことを介して、人生の変化の激越さを悲しんでいることである。さらに注目されるのは、杜鵑を美しく描くのではなく、おちぶれた姿で描いていることである。このような表現はこの詩以前には見られない。この詩について、忠孝の人物がかえって滅亡させられる当時の厳しい政治・社会状況を悲しんでいるとする説、東晋最後の皇帝恭帝(零陵)が劉裕(宋の高祖)に譲位し、不遇の最期を終えたことを寓するとの説など複数あると、錢仲聯注『鮑參軍集注』(巻四)に指摘がある。この鮑照の杜鵑の描き方は非常に尖鋭である。すなわち望帝の化身とされる杜鵑の姿に、現実レベルでかつては尊崇を集めた有徳の人物が、今は落魄してやつれはてている姿を重ね合わせてみているのである。そういう描き方がなされているのである。作者は根底において、杜鵑の姿に世の無常や不条理を見て、嘆き悲しんでいるのである。このように杜宇化鳥伝説を詠じただけにとどまらず、そこに直言できない世情への憤懣や自己の力の及ばぬ運命の転変への歎きを込める表現は、その後、杜甫に大きな影響を与えたと推察される。

第三節 盛唐の用例

以上のように、六朝時代においては、「子夜四時歌」、左思「蜀都賦」、そして鮑照「擬行路難」（其七）などに「杜鵑」「子規」が詠じられている。しかし、わずかに数例であり、唐以前、杜鵑は題材としてあまり文学に登場することはない、杜鵑が詩賦の中心的テーマとはなることはなかったといえる。だが、唐代に入ると、次第に多くの作品に詠じられるようになる。

植木論文は、初唐・沈佺期の「夜七盤嶺」詩に「帰心を促す悲声として子規を歌うの」が最初であろう、と指摘している。盛唐期については、やはり植木論文では、盛唐の王維（六九九？～七五九）には「杜鵑」二例、「子規」一例があることを指摘し、「送別詩に用いられ」、⁽¹³⁾「蜀へ旅立つ人を送る、という共通した特徴」があると述べている。

送楊長史赴果州 楊長史の果州に赴くを送る

褒斜不容幘 褒斜 幘を容れず

之子去何之 之の子 去って何くに之く

鳥道一千里 鳥道 一千里

猿声十二時 猿声 十二時

官橋祭酒客 官橋 祭酒の客

山木女郎祠 山木 女郎の祠

別後同明月 別後 明月を同じくし

君応聴子規 君 応に子規を聴くなるべし

（『王維集校注』巻六）

楊長史（長史は刺史の下に置かれた官）が果州に赴任するのを見送つ

た詩である。果州は四川省南充郡の地。首聯の褒・斜はいずれも谷の名であり、陝西省と四川省を結ぶ交通の要衝である。「幘」はほろのついた車。「不容幘」は、狭隘であるため、車も通れないことをいう。

領聯は、果州への旅の途中の情景である。果州は、空を飛ぶ鳥だけが通れるような道「鳥道」を行くこと千里のあなたの地であり、巴蜀に多いとされる猿の悲しげな声が一日中聞こえる。頸聯、官路の橋では出立に先立って道祖神を祀り酒を供える人々がおり、これから経る褒城の上には、山の木々に囲まれて女郎祠（褒城県の女郎山上にあった女郎廟のこととされる）が立っていることだろうと情景を想像する。

尾聯は、別後には、ただ明月を同じく見ることができただけだが、きっとあなたは蜀の子規の悲しい声を聞いて悲しむことだろうと、楊氏の赴く先蜀の地を想像し、別れ行く楊氏を思いやっている。蜀地方に多く、「蜀都賦」にも描かれた子規は、「蜀」から真っ先に連想されるものであり、哀しい声は異郷に身を置く悲しみを象徴すると認識されていたことが分かる。とはいえ、別れ行く楊氏の行く先である蜀の風物として典型化されているとも見ることができる。「送梓州李使君」（梓州の李使君を送る）においても、

萬壑樹參天 萬壑 樹 天に参し

千山響杜鵑 千山 杜鵑響く

と「送楊長史赴果州」と同様に蜀の景物の一部として「杜鵑」が用いられている。

以上、王維においての杜鵑は、蜀地方へ旅立つ人を見送る送別詩に見えることが確認でき、また、旅立つ人に行く先の蜀をイメージさせ

るものとして描かれることが指摘できる。同時に、「杜鵑」「子規」の悲哀に満ちた声が、異郷に旅し身を置く人と送り出す作者との悲しみの通奏低音のように響くものとして詠まれていることが分かる。しかし、典型的な蜀の風物として取り上げられていて、「杜宇化鳥説話」そのものが前面に表れてくるというようなことはない。

つぎに、杜甫より十一歳年上であり、盛唐を代表する詩人、李白（七〇一―七六二）の用例をみておきたい。植木論文が指摘するように、李白においては、「杜宇」「杜鵑」各一例、「子規」「子規鳥」各二例、合計六例（このほかに逸句一例。筆者の注記）の用例がある。¹⁴李白は二十歳までを蜀（四川省）で過ごしたとされ、李白にとっては故郷である。そのため、蜀を連想させる杜鵑に対しても、故郷への思い、すなわち望郷の念と結びつくものとして詠じられていることが指摘されている。

例えば、「蜀道難」では、第二十三句から二十五句で、次のように詠じられている。

蜀道難

又聞子規啼夜月愁空山	又た聞く	子規	夜月に啼いて空山に
蜀道之難 難於上青天	愁ふるを	蜀道の難きは	青天に上るよりも難し
使人聽此凋朱顏	人をして	此れを聴いて	朱顏を凋ましむ

（『李白全集編年注釈』開元十九年）

「蜀道難」という詩題は樂府題であり、蜀道の險峻さ、厳しさを歌

う作である。引用部では、子規が月下に啼いて、人氣のない山に悲愁の聲が響くのを聞くという。蜀の劍閣山を通る険しい道に行くことは、青空に上るよりも難しい。子規の声を聴けば、若く血氣盛んな人の顔さえ衰えさせるだろうとうたっている。子規の声は、悲愁を帯び、難路を行く旅人の悲しみを掻き立てるものと捉えられている。

次の例も基本的には同様である。

聞王昌齡左遷竜標遙有此寄

王昌齡の竜標に左遷せらるるを聞き遙かに此の寄する有り

楊花落尽子規啼	楊花落ち尽くして	子規啼く
聞道竜標過五溪	聞道く	竜標 五溪を過ぐと
我寄愁心与明月	我	愁心を寄せて明月に与ふ
随風直到夜郎西	風に随って	直ちに到れ 夜郎の西に

（『李白全集編年注釈』天宝七年）

王昌齡（六九八―七五五？）が竜標（湖南省）に左遷されたと聞いて寄せた詩である。王昌齡は盛唐の詩人で、七言絶句に優れていた。竜標は、当時巫州に属した現在の湖南省黔陽西南の地である。当時の認識では、最果ての地と言ってよい。王昌齡は、細行（ささいな礼法）を慎まなかったとの理由で、天宝六載（七四七）秋、江寧県（南京市）の丞から竜標県尉に左遷された。左遷の翌春に李白は王昌齡の消息を得てこの詩を作った。

起句は晩春、柳絮（柳の種に生じる白い羽毛）が舞い落ちつくし、子規が哀しげに啼く時節を詠じ、承句は、竜標に流された王昌齡が五溪（洞庭湖に流入する西・辰・巫・武・沅の五本の川の流域）あたり

を通ったと風の便りに聞いたことを詠じる。転句では、友の境遇を憂える気持ちを明るく月に託し、結句では、風に乗せて夜郎（地名）まで届けてほしいと願望を述べている。子規の声は、春の時候を告げるものであると同時に、その悲痛な響きが、李白の友の境遇を悲しむ気持ち「愁心」と通底するものとなっている。

また、望郷の念と結びつく場合もある。

宣城見杜鵑花 宣城にて杜鵑花を見る

蜀国曾聞子規鳥 蜀国に曾て子規鳥を聞き

宣城還見杜鵑花 宣城に還た杜鵑花を見る

一叫一回腸一斷 一叫一回腸一斷

三春三月憶三巴 三春三月三巴を憶ふ

（『李白全集編年注釈』広徳元年）

宣城（安徽省）で杜鵑花を見て詠じたものであるが、植木論文にもすでに「望郷の念」が子規の鳴き声と分かちがたく結びついているとの指摘がある。杜鵑花は、つつじ（躑躅）である。起句では、李白が青年期までを過ごした故郷の蜀で、かつて子規の声を聞いたことを想起し、承句では、今、宣城で杜鵑花を再び目にしたと歌う。転句では、一たび子規の叫び声を聞けば、望郷の思いに駆られ断腸の悲しみを覚えると、結句では、三春（孟春・仲春・季春）の三月（季春）に当たって、三巴（巴郡・巴西・巴東）と呼ばれる蜀の地を憶うと結ぶ。

杜鵑、子規は、口の中が赤い（前掲の『荊楚歳時記』にも「口赤く」とあった）ことから、血を吐くまで啼く鳥とされ、その血で赤く染まっていたのが杜鵑花であるとされていた。杜鵑は二月あるいは三月に啼くと

され、その頃に咲く赤い花が杜鵑花であるともいう。杜鵑は「不如帰（去）」と鳴くと、世俗でこの頃言われていたらしく、故郷への帰心を募らせるモチーフとなつてゆく。ちょうど、過渡期にこの作品があるだろう。

以上、李白の「杜鵑」「子規」を詠じた作品を見てきたが、基本的には杜鵑（子規）の悲痛な鳴き声に関心があり、それを描いていることが分かる。ただ、不遇な友を思う憂愁や望郷の念をその声に託しているものが多いのだが、蜀のイメージや憂愁に固定的に結びついていて、王維と同じく「杜宇化鳥説話」に踏み込んだ発想や表現があるわけではない。

第四節、杜甫の杜鵑の用例

さて、杜甫については、詩題として取り上げる「杜鵑」が一首、「杜鵑行」が二首、「子規」が一首ある。つまり、これまでに見た左思、鮑照、王維・李白と大きく違い、杜甫は杜鵑を一つの重要な題材と位置づけ、いわばテーマとした作品を制作したのである。この点は植木論文でもすでに指摘している。ところで、杜甫において「行」と題する楽府作品は、「兵車行」や「麗人行」「貧交行」など、社会問題を厳しく批判したものが多く、ここで「杜鵑行」と詩題に付けた点も注目すべきと考える。

これら詩題に「杜鵑」「子規」を用いた例としての四例を除いた用例は、「杜鵑」は九例、「子規」は四例、また「望帝」二例、「杜宇」「蜀天子」も各一例が見え、計二十一例となる。⁽¹⁵⁾（植木論文では、合計八首、

十六例。望帝も一例見えると指摘する。これは、王維・李白に比べて圧倒的に多い作例といえる。

次に「杜鵑」「子規」「杜宇」「望帝」「蜀天子」の杜甫の用例を挙げる。まず、詩題となっているものをあげ、次に詩中に用いた例を挙げる。『杜詩詳註』の巻数を記した。⁽¹⁶⁾

① 杜鵑

- ・「杜鵑行」(A) (詩題、巻九*以下、「杜鵑行」(A)と称す。)
 - ・「杜鵑行」(B) (詩題、巻十*以下、「杜鵑行」(B)と称す。)
 - ・「杜鵑」(詩題、巻十四)
 - ・杜鵑暮春至 (巻十四「杜鵑」)
 - ・杜鵑不來猿猱寒「啼」(巻二十「虎牙行」)
 - ・化作杜鵑似老鳥 (巻十「杜鵑行」)
 - ・西川有杜鵑 (巻十四「杜鵑」)
 - ・東川無杜鵑 (巻十四「杜鵑」)
 - ・涪萬(南)無杜鵑 (巻十四「杜鵑」)
 - ・雲南有杜鵑 (巻十四「杜鵑」)
 - ・猶解事杜鵑 (巻十四「杜鵑」)
 - ・傷春怯杜鵑 (巻十九「秋日夔州詠懷寄鄭監李賓客一百韻」)
- ### ② 子規
- ・「子規」(詩題、巻十四)
 - ・子規夜啼山竹裂 (巻二「元都壇歌寄元逸人」)
 - ・子規晝夜啼 (巻十四「客居」)
 - ・冥冥子規叫 (巻八「法鏡寺」)

・終日子規啼 (巻十四「子規」)

③ 望帝・杜宇

- ・古時杜宇称望帝 (巻九「杜鵑行」)
- ・望帝伝応実 (巻二十一「秋日荆南述懷三十韻」)

④ 蜀天子

- ・君不見昔日蜀天子 (巻十「杜鵑行」)

では、次に具体的に用例を見ることとする。乾元二年(七五九)の冬、杜甫が秦州から同谷に赴く途中、蜀に至る前の作品に「同谷紀行十二首」がある。その第六首「法鏡寺」詩の第十五句・十六句に子規が見える。

冥冥子規叫 冥冥 子規叫び

微徑不敢取 微徑 敢て取らず

(『杜詩詳註』巻八、『杜甫全集校注』巻八)

ここでの子規は、山林の奥で悲しげな声で鳴く鳥の形象であるとともに、本来晩春に鳴く鳥であるのに、ここでは冬でも鳴いているということが注目される。この作では、哀しげな声に着目した点はあらたな詠じ方であるが、王維・李白における蜀(に近い地域)を象徴する鳥としての杜鵑のイメージとほぼ同様であると言える。

ところが、成都に入ってから後の作品は、全く異なる詠じ方がなされる。まず「杜鵑行」(A)を見ることにしたい。

杜鵑行 (A)

古時杜宇称望帝 古時杜宇望帝と称す

魂作杜鵑何微細 魂は杜鵑と作る何ぞ微細なる

跳枝竄葉樹木中

枝に跳り葉に竄る樹木の中

搶伴瞥振雌雄

搶伴瞥振雌は雄に随ふ

毛衣慘黑貌憔悴

毛衣慘黑にして貌憔悴すれば

衆鳥安肯相尊崇

衆鳥安ぞ肯て相ひ尊崇せん

隳形不敢栖華屋

隳形敢て華屋に栖まず

短翮惟願巢深叢

短翮惟だ深叢に巢くふを願ふのみ

穿皮啄朽觜欲禿

皮を穿ち朽つるを啄み觜禿げんと欲し

苦飢始得食一蟲

苦だ飢ゑて始めて一虫を食らふを得たり

誰言養雛不自哺

誰か言ふ雛を養ふに自ら哺まずと

此語亦足為愚蒙

此の語亦た愚蒙と為すに足れり

声音咽咽如有謂

声音は咽咽として謂ふ有るが如く

号啼略与嬰兒同

号啼は略ぼ嬰兒と同じ

口乾垂血転迫促

口乾き血を垂れて転た迫促し

似欲上訴於蒼穹

上りて蒼穹に訴へんと欲するに似たり

蜀人聞之皆起立

蜀人之を聞けば皆な起立し

至今相效伝遺風

今に至るまで相ひ効ひて微風を伝ふ

乃知变化不可窮

乃ち知る变化の窮む可からざるを

豈思昔日居深宮

豈に思はんや昔日深宮に居り

嬪嬙左右如花紅

嬪嬙左右に花の如く紅なりしを

(『杜詩詳註』 卷九、『杜甫全集校注』 卷七)

清・仇兆鰲はこの詩はもとは夔州時代の作品に編集されていたが、「蜀人聞之」の語があることによって、成都での詩に編入したという。『杜甫全詩訳注』は上元元年（七六〇）の作とする。成都での見聞を

もとに広く杜鵑について詠じた作品である。

また、この詩について仇兆鰲は『文苑英華』（宋・李昉等撰）は司空曙^[1]の作とし、その注に「又杜甫集に見ゆ。蓋し両存して未だ決せず」とあると指摘している。しかし、清・錢謙益は、杜甫詩の古いテキスト（陳浩然本、黄鶴本）にこの詩が収められていることから杜甫の真作としている。これに対して、『杜詩鏡銓』に引く李因篤や明の浦起龍は他の杜甫の詩の内容を反駁していることから、杜甫の詩ではないとする。今、仇注に従う。

まず初句から第八句では、古代の望帝が位を譲り、魂が杜鵑に化したという伝説を踏まえながら、今のやつれおちぶれた様子を「微細」、「跳枝竄葉」、「搶伴瞥振」、「毛衣慘黑貌憔悴」と書き連ね、もはや他の鳥の尊崇を得られない状況を描き出す。次の第九句から第十六句では杜鵑の落魄した生熊を描く。たとえば觜は禿げ、飢えても一匹の虫を得るのがやつとであり、天に訴えるように切実な声で啼くと描く部分などにそれがみえる。そして最後の五句では、蜀の人々が落魄した杜鵑に対して、声を聞けば起立するほどに、今も蜀の望帝を偲び、その遺風を慕い続けているさまを描く。末尾では、華やかな宮廷生活を謳歌したかつての境遇から今の落魄した生への世の中の激変を慨嘆している。この作では、先に挙げた伝説『華陽国志』蜀志の骨子をほぼ踏まえている。しかし、それだけでなく、さらに第二節で言及した鮑照の「擬行路難十八首」（其七）をも踏まえている。重要なのは典拠を踏まえるだけでなく、作品の構造として踏まえつつ発展させている点である。「擬行路難」（其七）では、かつては尊崇されていた望帝の

化身たる杜鵑が傷ついた羽毛で虫を追いかけて、みじめに鳴いていること、かつての栄華は想像もできない姿であることを強烈に描いている。そうした望帝の転変に焦点を当てて「中心愴惻」という思いにかられることを歌っている。「杜鵑」の姿からそのような有為転変とみじめな現在を想起する表現は、鮑照の「擬行路難」（其七）の後には見られなかった。杜甫の「杜鵑行」（A）に至ってはじめて、そうした構造で杜鵑を歌う作品が復活したのである。しかも、鮑照の作が明瞭に語り得ない政治批判を寓意によって語ろうとしているその姿勢それ自体をも受け継いでいる。もちろん杜甫の作はそこにとどまっているわけではなく、玄宗皇帝（上皇）が宦官の意向に逆らうこともできず、冷遇され、翻弄されるという現実レベルに生起している事態の本質を抉りだしているのである。

杜甫の同じく「杜鵑行」（B）とする作が次の詩である。

杜鵑行（B）

君不見昔日蜀天子 君見ずや 昔日の蜀の天子
化為杜鵑似老鳥 化して杜鵑と為り老鳥に似たり
寄巢生子不自啄 巢に寄せ子を生むも自らは啄まず
群鳥至今為哺雛 群鳥 今に至るまで為に雛を哺む
雖同君臣有旧礼 君臣に同じく旧礼有りと雖も
骨肉滿眼身羈孤 骨肉は眼に満ちて身は羈孤なり
業工竄伏深樹裏 業に工みに竄伏す深樹の裏
四月五月偏号呼 四月五月偏に号び呼ぶ
其声哀痛口流血 其の声は哀痛 口は血を流すも

所訴何事常区区 訴ふる所 何事ぞ常に区区たり
爾惟摧殘始發憤 爾 豈に摧殘せられて始めて發憤し
羞帶羽翮傷形愚 羽翮を帯ぶるを羞ぢ形の愚なるを傷むか
蒼天變化誰料得 蒼天の變化は誰か料り得ん
万事反覆何所無 万事反覆して何の無き所ぞ
万事反覆何所無 万事反覆して何の無き所ぞ
豈憶當殿群臣趨 豈に憶はんや殿に当たり群臣の趨りしことを
（『杜詩詳註』卷十）

この詩は、前述の「杜鵑行」（A）制作の翌年、上元二年（七六一）、成都（四川省）での作である。前年七月には、宦官李輔国が上皇（玄宗）を脅かして、興慶宮から西内の甘露殿に遷したという。仇兆鰲の注には次のように述べる。

李輔国劫遷上皇、乃上元元年七月事。此詩借物傷感、当属上元二年作。（李輔国劫かして上皇を遷すは、乃ち上元元年七月の事なり。此の詩は物を借りて感ずるところを傷む。当に上元二年の作に属すべし。）

また、黄鶴の注に「觀其詩意、乃感明皇失位而作。」（其の詩意を觀るに、乃ち明皇の位を失ひしことに感じて作る）とあるのを引いている。この事件に関しては、『旧唐書』卷九、玄宗下には次の記載がある。乾元三年七月丁未、移幸西内之甘露殿。時閹宦李輔国離間肅宗、故移居西内。高力士、陳玄礼等遷謫、上皇浸不自憚。（乾元三年七月丁未、西内の甘露殿に移幸せしむ。時に閹宦李輔国 肅宗と離間せしめんとし、故に移して西内に居らしむ。高力士、陳玄礼

等も遷謫せられ、上皇 浸く自ら憚しまず。筆者注…乾元三年は四月に上元と改元。

この詩では、蜀の望帝伝説に基づきながら、讓位後の玄宗の不遇を傷んでいると考えられる。詠じられている伝説は、『華陽国志』や『文選』巻四の西晋・左思「蜀都賦」の注に引く『蜀記』に見える内容とほぼ一致する。

植木論文では、この作品について次のように述べている。

望帝杜宇が、こうした時世との関連で歌われるのは、劉宋の鮑照の用例があり、次の「杜鵑行」は、鮑照の「擬行路難」詩を直接の典拠としている。（この詩を引いて）。この作も、いわゆる比興的発想に基づく寓意の作とするのが、宋代以後の注釈書に見られる共通した捉え方である。南宋の洪邁（1123～1202）は、「明皇（玄宗）為（李）輔国却遷西内、肅宗不復定省、子美作杜鵑行、以傷之」と解釈している。

右の指摘にあるように、この作品は望帝を時世との関わりで詠じた寓意の作であると言えよう。加えてさらに重要だと思われる点は、先の「杜鵑行」（A）に続き、南朝宋・鮑照「擬行路難」（其七）が杜鵑と化した望帝の落魄と苦しみを詠じ、それに現実レベルで皇帝が悲劇的な最後を遂げたことを重ねて詠むという構造を継承していることである。この詩では、先の「杜鵑行」（A）よりさらに事態は深刻度を増していると言わなければならない。上皇（玄宗）が宦官によって冷遇されている事態から、さらに現在の皇帝である肅宗と隔絶され、政治の場から退場を余儀なくされたのであった。宦官という本来政治に

関与すべき立場にない者によって、上皇さえも逆らうことができなかったという、歪んだ権力構造が露呈しているのである。⁽¹⁸⁾

再度作品に戻って、構成をみておきたい。最初の四句では、前述のように、蜀の天子が杜鵑となり、老いたカラスのようなみずぼらしい姿となつてはいるが、杜鵑の代わりに他の鳥たちが雛を育てているという。晋・張華の『博物志』に、「杜鵑子を生み、之を他の巢に寄す。群鳥為に之を飼ふ」（杜鵑生子、寄之他巢、群鳥為飼之）とあるように、杜鵑は他の鳥の巢に托卵することが知られていた。ほかの鳥たちが、今も杜鵑のために雛を育てるという表現は、かつての英明な君主玄宗への尊敬の念が残っているためと考えられる。今も君王と臣下の礼は変わらないが、骨肉の親族は多いにもかかわらず、玄宗皇帝は讓位後、寂しい境遇にあるとその孤独を傷んでいる。玄宗皇帝は、安祿山の乱が勃発（天宝十四載（七五五）十一月）し、都長安に賊軍が侵攻してきた際、わずかな親族・官僚のみを伴って蜀に蒙塵しようとした。途中、馬嵬坡で親衛軍に迫られて楊国忠や楊貴妃を殺さざるをえなくなった。この時、袂を分かった皇太子李亨はその後、即位して肅宗となり、玄宗は讓位し上皇となった。長安奪還後、至徳二載（七五九）十二月上皇として還御し興慶宮（皇城の南東にある宮殿で玄宗皇帝が即位後に執務に当たっていた場所）に入った。上元元年（七六〇）七月、上皇（玄宗）が、宦官李輔国により、強制的に西内の甘露殿（皇城の北に位置する宮殿）に移されるという事件が起こる。この当時、肅宗は、皇城北東に位置する大明宮で政治を行っていた。すなわち、上皇が西内に移ることは、いわば政治の場から隔絶された状態となる

ことを意味した。この詩の制作時期はまさにこの事件の翌年に当たる。この詩は讓位後悲劇的な末路をたどった望帝に、玄宗の讓位後の孤独と不遇を重ねて慨嘆していると考えられる。この詩には、杜甫がこの事件のなりゆきをその深刻な本質とともに見つめていることが示されている。玄宗、肅宗が相次いで死去したのは、この詩の制作された上元二年の翌年上元三年四月（十日後宝応元年と改元）（七六二）のことであつた。

次に「杜鵑」詩を上げたい。

杜鵑

西川有杜鵑	西川	杜鵑有り
東川無杜鵑	東川	杜鵑無し
涪万無杜鵑	涪万	杜鵑無し
雲安有杜鵑	雲安	杜鵑有り
我昔遊錦城	我	昔 錦城に遊び
結廬錦水辺	廬を結ぶ	錦水の辺
有竹一頃餘	竹有り	一頃余
喬木上参天	喬木	上 天に参わる
杜鵑暮春至	杜鵑	暮春に至り
哀哀叫其間	哀哀	其の間に叫ぶ
我見常再拝	我は見て	常に再拝す
重是古帝魂	是れ古帝の魂なるを	重んずるなり
生子百鳥巢	子を百鳥の巢に	生むも
百鳥不敢噉	百鳥	敢て噉らず

仍為餒其子	仍ほ為にその子に餓はす
礼若奉至尊	礼は至尊に奉ずるが若し
鴻雁及羔羊	鴻雁及び羔羊
有礼太古前	礼有り 太古の前
行飛与跪乳	行飛と跪乳と
識序如知恩	序を識りて恩を知る
聖賢古法則	聖賢の古法則
付与後世伝	後世に付与して伝へしむ
君看禽鳥情	君看よ 禽鳥の情
猶解事杜鵑	猶ほ杜鵑に事ふるを解す
今忽暮春間	今忽ち暮春の間
值我病経年	我が病みて年を経るに値ふ
身病不能拝	身病みて拝する能はず
涙下如迸泉	涙下りて迸るる泉の如し

（『杜詩詳注』卷十四、『杜甫全集校注』卷十二）

この詩は大暦元年（七六六）春、雲安（四川省重慶市雲陽県）でのも作とされている。乾元二年（七五九）十二月からおおよそ成都に杜甫は滞在し、浣花草堂を営んでいたのであるが、知友嚴武の幕下に仕えるなど、嚴武から全面的な支援を受けていた。永泰元年（七六五）春、蜀中で反乱が相次ぎ、蜀を去ることを決意し、成都から南下し、嘉州、戎州へと向かう。ほぼ同時の四月に嚴武が卒した。杜甫は渝州、忠州をへて秋に雲安に到着したのであつた。

冒頭四句が目を引く（ただし、この四句について、杜甫の自注がま

ぎれ込んだもので、詩句でないとする説もある）。杜甫がかつていた場所、西川（蜀の西部、現在の成都）、東川（蜀の東部、梓州、今の四川省三台県）、涪州（今の重慶涪陵区）、万州（今の重慶万州区）、そして雲安（唐の県名で夔州に属していた。今の重慶市雲陽県）について、杜鵑を目にしたか声を聞いたか、その有無を重ねて詠じている。このことは、杜鵑を見たことが杜甫にとって重要な意味を持っていたことを示している。続く第五句から十三句では、かつて成都で目にした杜鵑の情景を詠じ、杜鵑を見るたび、杜鵑が古代の帝王の魂であることに敬意を表して常に再拝の礼を尽くしていたと回想している。第十四句から第二十一句では、杜鵑がほかの鳥の巢に雛を託しても、鳥たちは嫌がることなく養育するさまは、皇帝に仕える臣下の礼に則っており、雁や羊のような禽獣さえも兄弟や母子の礼を備えていることを指摘する。これは、前漢・董仲舒の『春秋繁露』巻十六に「羔は其の母に食うときは必ず跪きて之を受く。礼を知るに類する者なり。」（羔食其母必跪。類知礼者。）とあるのを踏まえた表現である。続く第二十二句から最後では、このような聖賢の礼法は、後世に伝えるべきであるが、今自身は病気がちのために、再拝したくてもできないことを嘆いている。宋・趙彦材（次公）が「此の詩は世乱れ、臣の義を明らかにする能はざる者の、禽鳥に若かざるを譏るなり」（此詩譏世乱不能明臣之義者、禽鳥之不若也）と述べるように、やはり杜鵑Ⅱ望帝に玄宗（あるいは当時の代宗）を重ね、臣下が節義を失していることを諷していると推測される。つまり、この詩においても杜鵑に寓意が込められており、前述の二つの「杜鵑行」と同様の構造がみられる。

具体的には、玄宗（そして肅宗）亡き後、いわば人々から絶大な尊敬を受けていた皇帝が退場した空白を衝くように、当時蜀で、段子璋（梓州刺史）、徐知道（成都少尹）、崔旰（西山都知兵馬使）らの反乱が相次いでいたことを諷諫したと考えられる¹⁹⁾。

また、ほぼ同時期に次に挙げる「子規」も作られた。

子規

峽裏雲安県 峽裏の雲安県

江楼翼瓦齐 江楼 翼瓦齐し

両辺山木合 両辺 山木合し

終日子規啼 終日 子規啼く

眇眇春風見 眇眇として春風に見え

蕭蕭夜色凄 蕭蕭として夜色凄たり

客愁那聽此 客愁 那んぞ此れを聴かん

故作傍人低 故に人に傍ひて低きを作す

（『杜詩詳註』巻十四、『杜甫全集校注』巻十二）

雲安は、重慶の少し上流に位置する地であるが、両岸が迫る峽谷地帯である。杜甫が今滞在する住まいの周辺の木々の間から、一日中杜鵑の声が響いてくるのである。春風の中で小さく見え、ひっそりと鳴く声は、夜の寂しさを一層際立たせ、旅人はこの声を聞くに耐えられない。しかもまるでわが身に寄りそうように低い声で鳴くのでなおさらである、という。ここでは、異郷に身を置く旅人の客愁を掻き立てる哀切な声がクローズアップされている。この詩は、右に挙げた「杜鵑行」二首、「杜鵑」の作とは、全く詩風が異なり、少なくとも表面

的には寓意は見られない。子規の哀切な声は旅愁をかきたてる存在として描かれているのではあるが、慨世の響きが通奏低音のように感じられよう。

以上が、詩題として杜鵑、子規を取り上げた作品である。

このほかにも詩中に杜鵑や子規の詩語を詠じたものがある。次の作品は少し後、大暦三年（七六八）秋の作「秋日荊南述懷三十韻」（秋日荊南にて懷ひを述ぶ三十韻）の第一句から二十句である。

秋日荊南述懷三十韻 秋日 荊南にて懷ひを述ぶ三十韻

昔承推獎分	昔 推獎の分を承けしも
愧匪挺生材	挺生の材に匪ざるを愧ず
遲暮宮臣忝	遲暮 宮臣を忝くし
艱危袞職陪	艱危 袞職に陪す
揚鑣隨日馭	鑣を揚げて日馭に随ひ
折檻出雲台	檻を折りて雲台より出ず
罪戾寬猶活	罪戾 寬されて猶ほ活かされ
干戈塞未開	干戈 塞がりて未だ開かず
星霜玄鳥變	星霜 玄鳥變じ
身世白駒催	身世 白駒催す
伏枕因超忽	枕に伏すは超忽たるに因り
扁舟任往來	扁舟 往來するに任す
九鑕巴嚶火	九たび鑕る巴の嚶きし火
三蟄楚祠雷	三たび蟄る楚の祠の雷
望帝傳應実	望帝 伝ふるは応に実なるべし

昭王問不廻	昭王 問へども廻らず
蛟螭深作横	蛟螭 深くして横を作し
豺虎乱雄猜	豺虎 乱れて猜を雄んにす
素業行已矣	素業 行くゆく已んぬるかな
浮名安在哉	浮名 安くにか在らんや

大暦三年、杜甫は五十七歳であった。永泰元年（七六五）五月に成都を発つて以来、雲安、夔州をへて、この年の春には夔州を後にしてさらに長江を下り、江陵に滞在していた。この詩の第一段落（第一句から八句）では、昔、宰相房琯の推獎を受けて、肅宗皇帝の下で左拾遺の任にあつたことから語り始める。しかし、杜甫が左拾遺着任まもなく、房琯は讒言を受けて罪に問われた。それを命がけで弁護した杜甫も弾劾裁判を受け、かろうじて死罪は許された一連の房琯事件を振り返っている。⁽²⁰⁾第二段落（第九句から十八句）では、その後の時間の経過と世の移り変わりに言及する。巴蜀で九年、巫山一带（雲安、夔州など）で三年過ごしたことを述べ、ここで、その間の政治状況を寓言によつて述べる。

望帝伝應実	望帝 伝ふるは応に実なるべし
昭王問不廻	昭王 問へども廻らず

望帝、昭王（周王朝第四代の王。楚に南征中に敗死したとされる）ともに非業の最期を遂げた皇帝である。ここでは宦官によつて上皇（玄宗）が無理やり西内に移され、政治から隔絶され、幽閉に近い境遇に置かれて崩御したことを寓している。その後、玄宗に続いて肅宗も崩御し代宗が即位した。第十七句・十八句では、その政治的空白を

衝いて、將軍達の一部が横暴を極め、地方の軍閥が叛乱を起こすなど、唐王朝の求心力が急速に失われている現実の問題意識を表している。

この詩について、植木論文には、第十五句から十八句を引いて、次のように述べている。

「望帝、伝 応に実なるべし」とは、いわゆる杜宇化鳥説話の肯定であるが、前の二句も、後の二句と同様に、巴蜀にまつわる伝承の単なる叙述ではない。明末清初の錢謙益は、「杜詩錢注」巻17で

望帝、借以喻玄宗也、代宗苦李輔国、而不能明正其罪、使盜竊其首、猶昭王南征不復、而周人不能問之於楚也、

と述べている。清の仇兆鰲も、玄宗が李輔国に却かされて西内に遷り、憂愁のうちに没したことを望帝・昭王の故事にたとえたとする（『杜少陵詳註』巻21）

大変重要な指摘であると考ええる。しかし、植木論文ではこの問題の本質について、これ以上には深い言及がなされていない。

重要なのは、従来の詩人、王維や李白の「杜鵑」「子規」の詠じ方には見られない、杜甫のこのテーマに対する姿勢であり、問題意識であったと考える。現実の時代の動きに対する切迫した危機意識がこの詩には滲みでていて、それは先述の成都時代、および雲安時代の杜甫の問題意識全体に関わるものである。

杜甫の問題意識は、先にも述べたように、讓位後の玄宗をさらに政権の場、大明宮から隔絶した西内へと移すという事件が、実は孕んでいる本質に関わる危機意識と言える。これまでも宦官の専横に杜甫は

心を痛めてきた。しかし、今回の事件は、本来政務に関わるべきではない宦官李輔国らによって上皇、かつて天下泰平の開元・天宝の治を現出した玄宗を政治の場から切り離そうとするものであった。上皇を政治の場から駆逐することは、ひいては玄宗の諸王達を政治から遠ざけることにもつながる。つまり皇帝の権力を削ぎ、宦官の隠然たる権力を増大させる結果に帰着するのではないか。いわば国家の体制そのものを揺るがしかねない重大な問題であることを杜甫は鋭敏に感じ取っていたのである。しかし、宦官に関連する批判、それは決して口外はできないがゆえに望帝説話に寓して危機意識を発しているのである。この讒言を恐れて口外できないことについては、この詩の第二十七句・二十八句に見える次の表現が証している。

結舌防讒柄 舌を結びて讒柄を防ぎ

探腸有禍胎 腸を探れば禍胎有り

自身の言説が讒言に利用されるかもしれない危機感を抱きつつも、災禍を引き起こしかねない批判が腹中に渦巻いていたのである。杜甫は房琯事件以来、房琯一派と目されてきたこともあり、また「三吏三別」などの峻烈な政治批判詩を制作したことが間接的な要因となって、華州司功参軍を辞職し、放浪の旅に出たのであった。政治批判の言説によって讒言を受けかねないと言葉には細心の注意を払っていたと推察されるのである。成都時代以来、杜甫がしきりに杜鵑・子規や望帝を歌うのは、望帝説話をこの問題を寓するための格好の題材として選び取ったからに他ならない。

確かに植木論文に

「杜鵑行」「杜鵑」「子規」等、鳥の名をそのまま詩題（樂府題）として用いるのは、杜甫に始まるといってよい。杜鵑・子規が次第に詩の素材・題材としての価値を高めていく結果であり、特に中唐詩以降にしばしば見られる命名方法である。

との指摘通り、「杜鵑」「子規」の用例が唐代、次第に増えてきた流れに乗って、杜甫がそれを詩語として用いたという面はあるだろう。しかし、杜甫にとって「杜鵑」「子規」を描くこと、特にそれを詩題として正面から描くことは、新しい試みであると同時に、本質的に従来の詩とは違う意味を持つものだった。

おわりに

まず拙論のはじめに、二つの問題意識を提示していた。一つ目は、なぜ成都や雲安滞在時期に杜鵑や子規が多く詠じられているのか、そして二つ目は、杜甫が杜鵑にどのような思いを託しているのかということである。

第一節では、杜甫に先立つ杜鵑や子規の伝説、特に杜甫詩に描かれる源流となったと思われる伝説を確認した。

第二節では、杜甫に先行する文学作品に描かれた杜鵑について、六朝時代の「子夜四時歌春歌」、左思「蜀都賦」、鮑照「擬行路難」（其七）について検討した。「子夜四時歌」では、杜鵑の声は春を告げるものとして捉えられていた。「蜀都賦」では、偉大な帝王ながら悲劇的な最後を迎えた蜀の望帝の魂魄が、杜鵑に化したことを詠じていた。また、「擬行路難」（其七）では、かつての蜀王望帝の化身とされる杜鵑

のみじめでおちぶれた姿を描きだし、そこに鮑照の当時の政治上不遇な人物が仮託されていると推測されることを述べた。

第三節では、杜甫と同時代の代表的詩人王維、李白の詩を取り上げ、杜鵑のイメージを探った。王維は蜀に旅立つ人を見送る際に、旅先の蜀の情景を想像で描き出し、そこに哀切な声で鳴く杜鵑を描くことで、別れ行く人への共感を表出していた。李白は、「蜀道難」では、杜鵑の哀切な声を蜀の情景として描き、その他の詩では、自身の故郷である蜀への望郷の念を杜鵑の鳴き声に託していることが明らかになった。

第四節では、杜甫の杜鵑や子規を詩題として詠じた作品を主に取り上げ、杜鵑に杜甫が何を託したのかを考察した。その結果、「杜鵑行」や「杜鵑」などでは、蜀の伝説上の偉人望帝の化身とされる杜鵑のおちぶれた姿を描き、それに仮託する形で、かつて英明な君主と称えられた玄宗皇帝が、讓位後臣下や宦官などに蔑ろにされ、不遇な状況に置かれていることを詠じていた。また、世の常なさを慨嘆し、あるいは君臣の礼が廃れていることを諷諫していた。杜甫は、鮑照の「擬行路難」（其七）における現実の政治での不遇な人物を杜鵑に寓するという構造を継承しつつ、さらに切迫した現実の国家の危機に繋がる問題を寓するために杜鵑を詩題として選んだのである。これは従来の杜鵑の歌い方とは全く異なる構造をもつ表現であった。

杜甫は、「一生憂う」と評され、現実主義的な社会批判の表現に特徴があるが、杜鵑・子規の形象においても、その傾向は明らかである。乾元二年（七五九）秋、華州司功參軍を辞して、秦州（今の甘肅省天

水市)、同谷(今の甘肅省隴南市)、成都(今の四川省成都市)へと流浪の旅に出た杜甫ではあったが、やはり常に現実の社会状況に切実な関心を抱き続け、詩において現実と切り結ぶことを目指していたことがうかがわれる。成都や雲安滞在中に、杜鵑や子規を詠じた作品が多い理由としては、蜀の成都に約六年余りにわたって居住し、蜀の風物を直接に見聞する機会を得たということもあるだろう。しかし、重要なことは、杜鵑から髣髴させられる望帝の譲位後の悲劇的な末路に、玄宗の譲位後の不如意の姿を重ねて捉えたことが、最大の理由であると言えよう。むしろ、上皇(玄宗)の惨澹たる境遇を寓するために、杜鵑が題材として選ばれたに違いないのである。この点で、王維や李白の杜鵑・子規の描き方と比べると、杜甫の歌い方はその延長線上には決してなく、画然とした違いがある。

杜甫にも、従来の蜀を象徴する形象・情景としてのイメージや、哀切な声で鳴くイメージで杜鵑・子規を描く例がないわけではないが、杜鵑の落魄の様子、他の鳥(臣下)との関係を描くことは、宋の鮑照の「擬行路難」(其七)以外には、それまで見られなかったイメージである。そして、落魄し、惨澹たる杜鵑＝望帝に寓することを介して、かつて英明な君主として開元・天宝の治を現出させた玄宗皇帝が、いまでは幽閉同然の生活を余儀なくされ、不遇の晩年を送っていることへの憤りに近い慨嘆が込められているのである。

また、杜甫が宦官による上皇(玄宗)の移遷にみられる権力の剥奪や、現在の朝廷の退潮が進行しつつあることを透徹したまなざしで見抜いていたからこそ、杜鵑や子規を詩題とした詩を繰り返し歌わねば

ならなかったのである。

【注】

(1) 杜甫の用例について、植木論文で言及している主な論点は次の通りである。

①「秋日荊南述懷三十韻」及び「杜鵑行」では、鮑照「擬行路難」の用例において時世との関連で、皇帝の落魄した姿を寄託するのを踏襲しており、望帝が杜鵑に化身したという化鳥説に基づいて詠じられている。

②托卵についての言及がある。

③「啼血」を詠み込んでいる。

④「杜鵑行」「杜鵑」「子規」など、鳥の名をそのまま詩題とするのは、杜甫に始まる。

⑤「子規」では、作者の客愁に耐えられない心情をうたう。このほか、望郷の念をうたうものもみられる。

⑥杜甫の以上の「杜鵑」の描きかたが、中唐詩以降の詩に大きな影響を与えている。

なお、植木久行著『唐詩歳時記』(講談社学術文庫、一九九五年)の「春の詩」の部分にも杜鵑や杜宇化鳥説話などについての記載がある。

(2) 漢・揚雄著『蜀王本紀』は、現存しない。現行のテキストは類書などに残る断片を拾遺し復元を試みたものである。『中国古典小説選1 穆天子伝・漢武故事・神異経・山海経他(漢・魏)』(武

田晃・黒田真美子編、明治書院、二〇〇七年）に訳注がある。なお、揚雄の作ではなく後人の作とする説もある。望帝に関する伝説部分を抜粋しておく。

後有一男子。名曰杜宇。從天墮止朱提。有一女子名利、從井中出。為杜宇妻。乃自立為蜀王、号曰望帝。治汶山下邑曰郫。化民往往復出。望帝積百余歲。荊有一人名蠶靈。其尸亡去。荊人求之不得。蠶靈尸隨江水上至郫、遂活。与望帝相見、望帝以蠶靈為相。時玉山出水、若堯之洪水。望帝不能治、使蠶靈決玉山、民得安处。蠶靈治水去後、望帝与其妻通。慚媿、自以德薄不如蠶靈、乃委国授之而去、如堯之禪舜。蠶靈即位、号曰開明帝。帝生盧保、亦号開明。望帝去時、子鵪鳴。故蜀人悲子鵪鳴而思望帝。望帝杜宇也。從天墮。

なお、植木論文では、揚雄の『蜀王本紀』に杜宇伝説が記載されていたことは疑いがなく、また杜宇化鳥説が本来の記述だったと考察している。

(3) 『禽經』は、春秋時代の師曠撰、晋・張華注とされるが、依託で偽本とされる（『四庫提要』子部）。明・李時珍編『本草綱目』卷四十九（文淵閣『四庫全書』電子版）、「杜鵑」に引く『禽經』に「江左では子規と曰ひ、蜀右では杜宇と曰ひ、甌越では怨鳥と曰ふ」とある。

(4) 明・李時珍編『本草綱目』（注3前掲書によった）に引く、唐・陳藏器編『本草拾遺二十六種』には「杜鵑は小さきこと鵪の如く、鳴き呼んで已まず」とあり、続けて蜀王本紀、荊楚歲時記、異苑

を引く。

(5) 晋・常璩撰『華陽国志』（中林史朗訳注、明德出版社、一九九五年）

(6) 梁・宗懐撰『荊楚歲時記』（守屋美都雄・布目潮瀨・中村裕一訳注、平凡社東洋文庫、一九七八年）。ただし、引用部分は後世の補遺とされている。『漢魏六朝筆記小説』所収の据広漢魏叢書本影印『荊楚歲時記』の三月の項には当該部分は見えない。

(7) 宋・郭茂倩撰『樂府詩集』（中華書局、一九八九年）。この他、梁・簡文帝「蜀国絃歌篇十韻」にも「性は祈る望帝の祀に、酒は酔す蜀侯の妹（誅）に」とある（『先秦漢魏晉南北朝詩』梁詩卷二十）。

(8) 興膳宏編『六朝詩人傳』（大修館書店、二〇〇〇年）。引用部分は幸福香織氏の訳文。

(9) 人主其の臣の忠なるを欲せざるは莫し。而れども忠未だ必ずしも信ぜられず。故に伍員は江に流され、萇弘は蜀に死す。其の血を蔵すること三年にして、化して碧と為る。（人主莫不欲其臣之忠。而忠未必信。故伍員流於江、萇弘死於蜀。蔵其血三年、化而為碧。）

（清・王先謙撰『莊子集解』、中華書局、一九八七年）

(10) 『蜀記』は、後漢の李膺の『益州記』の中にあるという（筆者未見）。

(11) 鮑照詩の引用は錢仲聯增補集説校『鮑參軍集注』（上海古籍出版社、一九八〇年十一月）によった。宋・郭茂倩『樂府詩集』卷七十では、「行路難」の題で所収され、題下注には、次のように記されている。

『樂府解題』曰「行路難」、備言世路艱難及離別悲傷之意、多以君不見為首。

- (12) 古詩十九首其十五（昭明太子撰『文選』卷二十九）に見える次の表現を踏まえるであろう。

出郭門直視 郭門を出でて直視すれば

但見丘与墳 但だ 丘と墳とを見る

古墓犁為田 古墓 犁れて田と為り

松柏擢為薪 松柏 摧かれて薪と為る

- (13) 王維の詩は『王維詩集校注』（陳鉄民校注、中華書局、一九九七年）によった。用例の検索は、『全唐詩索引 王維』（中華書局、一九九二年）によった。

- (14) 李白にはこのほか、「涇溪東亭寄鄭少府諤」（『李白全集編年注釈』天寶十四載）に「杜鵑花開春已闌、歸向陵陽釣魚晚」とあり、「書情寄從弟邠州長史昭」に「臨玩忽云夕、杜鵑夜鳴悲」（『李白全集編年注釈』未編年詩）とある。李白の詩は『李白全集編年注釈』（安旗主編、巴蜀書社、二〇〇〇年）によった。用例の検索は、『全唐詩索引 李白』（現代出版社、一九九五年）によった。

- (15) 杜甫の用例の検索は、『杜詩引得』（哈仏燕京大学、一九六五年）、『全唐詩索引 杜甫』（上下二冊、天津古籍出版社、一九九七年）を用いた。

- (16) 杜甫のテキストには、清・仇兆鰲注『杜詩詳註』（中華書局、一九七九）を用い、蕭滌非主編『杜甫全集校注』（全十二冊。人民文学出版社、二〇一四年）、および下雅弘・松原朗編『杜甫

全詩訳注』（全四冊）（講談社学術文庫、二〇一六年）を参照した。

- (17) 司空曙、字は文明、広平の人。進士に及第し、韋臯に従って劍南（唐代に置かれた行政区画劍南道のこと、現在の四川省劍閣の南部）に赴き、最終官は虞部郎中に至った。大暦の十才子の一人。『全唐詩』巻二九三巻に「杜鵑行」として、この詩を収め、注に「一に杜甫詩に作る」（一作杜甫詩）と記している。

- (18) 松本保宣氏は、宦官李輔国は上皇玄宗と高力士らのグループと微妙な関係にあり、肅宗が病んでいる時に乗じて、玄宗を太極宮に幽閉し、高力士ら上皇愛顧の側近達を追放してしまったと指摘している（『大唐帝国を牛耳った宦官たち』『しにか』二〇〇〇年十一月号、大修館書店）。一方、川合康三氏は、杜鵑に身を落とした望帝は、帝位を失った玄宗を暗示する、との見方に疑義を述べている（『杜甫 上』明治書院、新釈漢文大系、二〇一九年五月）。
- (19) 明・浦起龍は「詩詠杜鵑、而主意乃在禽鳥之事。杜鵑者、蓋託物以為臣節諷也。（中略）時蜀乱相仍、如段子璋、徐知道、崔旰之徒、皆不修臣節者。託諷之意、蓋在於此。」（『読杜心解』巻一之四・五古）と述べている。

- (20) 拙論「杜甫の社会批判詩と房琯事件」（『日本中国学会報』第五十三集、日本中国学会、二〇〇一年）、「杜甫の「故の相国清河房公を祭る文」の語るもの」（佐藤保・宮尾正樹編『ああ、哀しいかなー死と向き合う中国文学ー』所収、汲古書院、二〇〇二年）に、杜甫が遭遇した房琯事件について述べている。

- (21) 華州司功参軍を辞職した経緯については、よく分かっていない。

長安付近が飢饉に見舞われたために官職を辞したとする説もあるが、辞職直前の作「立秋後題す」（立秋後題）に「官を罷むるも亦た人に由る、何事ぞ形役に拘せられん」（罷官亦由人、何事拘形役）と述べているため、辞職する少し前に制作した「三吏三別」詩での痛烈な政治批判によって、やめさせられたとみる説もある。